

劇団☆新感線の挑戦（2）

— R シリーズ —

渡辺 芳敬

劇団☆新感線の「いのうえ歌舞伎」がいわゆる歌舞伎の脱構築を図ったものであるとするなら、「音もの（R シリーズ）」（「劇中、オリジナルの ROCK の楽曲が生バンドで演奏され、歌楽曲が多数あるシリーズ」）はいわゆるミュージカルへの挑戦といえることができる。時代活劇ならぬ音楽活劇。いずれも歌あり踊りありの「音もの」だが、『SHIROH』（2004）『メタルマクベス』（2006 初演／2018 再演）が硬派の「音もの」なら、古田新太が石川五右衛門に紛し、暴れ回る『五右衛門ロック』シリーズ三部作（『五右衛門ロック』（2008）『薔薇とサムライ』（2010）『ZIPANG PUNK～五右衛門ロックⅢ』（2012）と生田斗真主演の『Vamp Bamboo Burn～ヴァン・バン・バーン』（2016）は、エンターテインメントに徹した作品といえよう。演出のいのうえひでのりも「最も〈お気楽〉で、最も〈テキトー〉で、最も〈強引〉な作品」¹とコメントしている。

ここでは、音もの（R シリーズ）の主たる作品についてみていくことにしよう。オリジナルミュージカルの新たな可能性が見えてくるはずだ²。

1 SHIROH

1-1 概要

脚本中島かずき（1959～）、音楽岡崎司、演出いのうえひでのり（1960～）。なお、楽曲の作詞には中島のほかに、デーモン小暮、山野英明、いのうえが加わっている。

『SHIROH』は天草四郎と島原の乱を材とした新感線の初ロック・ミュージカルだが、中島によれば、アンドリュー・ロイド・ウェバーの出世作『ジーザス・クライスト・スーパースター』（1971）の衝撃が最初にあるという。いのうえもロックボーカリストの歌声にカリスマ性を感じていたが、ウィーン・ミュージカル『モーツァルト！』（2002）の主演スター中川晃教の存在を得て、舞台化が実現したという。天草四郎あるいは島原・天草の乱を扱った映画や小説は多々あるが、ミュージカル版は新感線版が初であり、近年、宝塚歌劇団でも上演された³。

ミュージカルは第一幕「いんへるの」、第二幕「はらいそ」の二幕からなり、タイトル通り、地

獄から天国への道行き、島原藩と唐津藩天草領、ひいては江戸幕府の圧政からキリシタンらが解放される物語である。舞台は現代、いや江戸の雑踏からはじまり、島原・天草の乱とは何であったのか、唯一の生き証人寿庵（高橋由美子）に問いかけるとい形ではじまる。

ときは1630年代。「救い主」「天の御子」と呼ばれる男がいる。キリシタン大名小西行長の遺臣・益田好次（通称甚兵衛：植本潤）の子、益田四郎時貞（上川隆也）だ。しかしかれは自分は「天の御子」ではないという。他方、場所は天草。シロー（中川晃教）と呼ばれる歌で人の心を操る少年がいる。かれは伴天連の子供である仲間とともに日本を脱出しようと夢見ている。そこに江戸幕府松平伊豆守信綱（江守徹）の隠密・お密（秋山菜津子）が現れ、シローに「歌で人の役にたてば」とささやく。シローはその言葉に動かされ、四郎親子を中心とするキリシタン等と懇意になる。かれの歌は不思議な力にあふれ、四郎とともに、ふたりのSHIROHとして人々の中心になっていく。しかし、幕府の圧力も次第に大きくなり、彼らはついに一揆に舵を切る。「島原・天草の乱」のはじまりだ。すべては伊豆守の思ふ壺、手のひらのコマにすぎないと知りつつ、人々は「まるちり」「殉教」に向かって直進する。四郎は伊豆守との和解に応じるかにみせてかれを暗殺しようとするが失敗。かえってシローの不信を買ってしまう。お密の正体が暴かれ、彼女が伊豆守の手にかかって死ぬや、シローの怒りは頂点に達する。かれは「まるちりだ！ 殉教だ！ 聖戦だ！ 最後の審判だ！ 皆殺しだ！」⁴と叫んで射殺される。それを見た民衆は立ちあがり、みな進んで死んでいく。「死に場所」を見つけたとでもいうように、満足気に。四郎ひとり「無駄死」するなと叫ぶが、誰ひとりとめることはできない。密かに愛する寿庵さえ失ってしまう。かれもまた神に向かって叫ぶ。「何のためにあなたはわたしを選んだ！ こんな皆殺しのためか！」(166)と。そのとき、奇跡が生まれる。かれの命と引き替えに、寿庵が息を吹き返す！ こうして、彼女は「奇跡の子」がいたことを、「約束の地」があったことを伝えるために「語り部」として生き延びることになったという結末だ。

このミュージカルの最大の特徴は、もちろんふたりのSHIROHだ。

ここに登場する人物たちはおおかた史実通りだが、たとえば幕府側の隠密のひとりとして登場する柳生十兵衛は実在の人物だが、史実的にはおかしい。柳生十兵衛と天草四郎が対決する『魔界転生』等の影響があるのかもしれない。そこでは天草四郎が魔界衆のひとりとして登場するからだ。他方、史実にはない人物としては、シローのほか、寿庵、お密、お香（高田聖子）、リオ（大塚ちひろ）といった女性陣たちが挙げられる。寿庵は『天草四郎陣中旗』の作者であり、唯一の生き残りとして有名な南蛮絵師・山田右衛門作の娘という設定である。ただまったくオリジナルかといえばそのあたりは不透明で、乱の直前に「加須佐寿庵」の名でキリシタン一揆参加への檄が飛ばされたというエピソードが残っている。お密、お紅は松平信綱を支える女隠密の姉妹であり、シローをめぐって袂をわかつことになる。「見つめる少女」リオは、ふたりの四郎・シローにしか見えないシンボリックな存在であり、かつて四郎が病を直し、その際あげた十字架のせいで捕まり、磔にされた少女である。これは、天草四郎時貞が盲目の少女に触れるや、視力を取り戻したという逸話を踏まえ

ているのかもしれないが、彼女が歌う「あなたの御魂をはらいそに」はこのミュージカル全体を主導するキー曲であり、結末にむけての伏線とっていい。

ふたりの SHIROH。益田四郎とシロー。島原の四郎と天草のシロー。シローが歌でみんなの志気を高め、四郎が策を練り、みんなを指揮する。「志気と指揮」。ちなみに、通常、益田四郎時貞が天草四郎と呼ばれるが、母の実家である天草諸島の大矢野島で生まれたからだろうか。詳細はわかっていない。四郎は長崎で勉学に励み、そこでキリスト教に入信し、一揆直前に父とともに天草に移ったとされる。ふたりの SHIROH の設定は、いわば実在の天草四郎（かれにまつわるもろもろのイメージも含め）を二分したといえるが、そこでは「天の御子」であることに懐疑する四郎とカリスマ化されていくシローという対比が浮き彫りになる。四郎は自分がカリスマ化されていくことに逡巡しつつ、シローを前にして、なぜ自分ではないのか（自分が選ばれないのか）と反問する。他方シローは、自分の意に反して「天の神子」と呼ばれ、カリスマ化されていくことに戸惑いを覚えつつ（「まるで俺が俺じゃないみたいだ」(96)）、最終的にみずからの運命としてカリスマとして生きていくことを受け入れる。

「誰かのために死ぬとかカッコいいこと言ってるけど、ただ、今の現実を諦めているだけじゃないか。俺はいやだ。俺は生きる。生きてこの牢を出る」(77)。どうやって？「その腕を振り上げろ。その足を踏みならせ。この世に神がいるというのなら、その握った拳に初めて神が宿るはずだ」(78)。海の向こうに自由があるといっていたシローが一転、拳に神が宿るといいはなつ。背後にはリオの姿があり、「その心に自由がある」「その胸に神が宿る」(78)と唱和する。「天の御子」シローが誕生するのはこのときだ。

もうひとり、「天の御子」シローを生んだのは隠密のお密だ。彼女はシローの歌の力に魅せられ、「あんたの歌で人を動かせるんならなんでそれを人のために使わない」(22)とシローを説きふせる。「神様があんたにその力を与えてくれたんなら、それを力のない人達のために使いなさいよ」(23)。しかし、幕府の密偵であることが四郎らにわかり、処罰されかかる（「ユダ。キリストを売った裏切りの使徒」として）。シローはその前に立ちはだかり、彼女を裁くのなら、俺も裁けと迫る。四郎とシローが衝突しようとするまさにそのとき、お密はシローの首に短剣を突きつけ、事の真相をあかす。すべては松平伊豆守の策であり、「この日の本にくすぶる火種があるならば、それを一ヶ所に集めて燃やし尽くす。その時初めて天下に平安が訪れる。この島原がその大花火に選ばれたのさ」「その火薬庫に火をつけるのが、あんただったんだよ、シロー」「徳川幕府に逆らうと、こんなひどい目に遭うぞ。そのための生け贄の羊なんだよ、あんたらは！」(138)。二転三転、お密は結局シローと助けようとするが、最終的に伊豆守の手にかかって死ぬ。シローに抱かれながら、お密は「あたしもはらいそに行けるかねえ」とひとりごつ。洗礼を求めるお密にむかって、シローは「マリアお密」と命名する。微笑みながら、力尽きるお密。シローの悲しみ、いや怒りは頂点に達する。「これが、神の仕打ちか。父なるデウスの仕打ちなのか！」

見ろ、死体の山を。ゼンザ、マツ、ゲン…そしてお密。何のために命を捨てた。誰のために命を奪われた。神か、父なるデウスか。主よ、貴様はそれほど人間の血が欲しいのか。わかった。だったらキリシタン三万七千の命、貴様にくれてやる。それだけじゃない。幕府軍も道連れだ。この島原に十万の血を流してやる。その血で渴きをいやすがいい！ (156)

「神はそんなことは望んでいない!？」と叫ぶ四郎の制止をふりはらって、シローは高らかに宣言する。

さあ、みんな。最後の戦いだ！ その身を神に捧げるぞ！ まるちりだ！ 殉教だ！
聖戦だ！ いいや、これは最後の審判だ！ (…)
ラスト・ジャッジメント、皆殺しだ!？ (157)

「まるちりだ、殉教だ」は甚兵衛、お福（杏子）親子、さらにはキリシタン達の合い言葉だ。最初、シローはその言葉についていけず、「死ぬのがそんなに楽しいのか」といっていたはずだ。そのかれが最後にこのことばを口にする。「我らの御魂ははらいそに」。とはいえ、皆殺しとは、世界の終わりの謂だろうか。世界は滅び、キリストが再臨し、最後の審判がくだされるのだとすれば。

シローの真意はどこにあるのだろうか。「無駄死にはよせ。逃げたい者は逃げろ！」という四郎の言葉はもう誰にも届かない。父甚兵衛も「この年寄りが死に場所を見つけたのは確かだ」(160)と微笑む。十兵衛の剣に倒れた寿庵を抱きながら、四郎は激白する。「醜いのは俺の心だ。仲間を悪魔に売ったのは俺の方だ。ユダは、私だ」(165)。寿庵はそんな「醜い心の、弱い心」の四郎が好きだったといって死んでいく。

「皆殺しだ」は「皆殺しにする」ではなく、「皆殺しになる」に転化する。シローはいままさに「救い主」「天の御子」になったのだ！ 死に場所とは何だろうか。死に場所を持たない／持てない人間が多すぎるということか。伊豆守もまたいっていたはずだ。倒れたお密にむかって「死に場所くらいはみつけれられたな」と。死に場所とは生き場所、「魂の自由」があったということの裏返しだろうか。死に値する場所、死ぬことをも厭わない場所。そうであればあるほど、シローの言葉は謎めいてくる。「皆殺し」と「最後の審判」「ラスト・ジャッジメント」の間の無限大の距離だ。ここには、「救い主」であることを呪う人間と「救い主」として崇めたてられる人間がいる。「救い主」になった人間と「救い主」を見つけた人間、あるいは「救い主」を信じさせた人間と「救い主」を信じた人間。シローはひとりの怒れる「人間」として死んでいくのに、ひとびとはかれに「救い主」「天の御子」の出現を見てとる（磔にされて死んだシローにリオが口付けすると、シローは復活する。ほとんどキリストのイメージであることはたしかだが）。しかし、最後にどんでん返しがまっている。もうひとりの、かつての「天の御子」四郎の復活だ。「この手はもう何もあたえることはできないのか。何のためにあなたはわたしを選んだ！ こんな皆殺しのためか！」(166)と神に訴える

四郎に「奇跡」が生まれる。寿庵の前で手をかざすと、すべてのひとびとが光で包まれ、四郎の命と引き替えに寿庵が息を吹き返すという「奇跡」が。こうして四郎もまた真に「救い主」「天の御子」となるのだ！ かくして寿庵は南蛮絵師・山田右衛門作同様、島原・天草の乱の「生き証人」として生き延びることになる。

なぜふたりの SHIROH なのか。「天の御子」の葛藤をそこにみるべきだろうか。滅ぶことによってしか救われないという新感線、いや作者中島がずきの思想・美学がすけて見える。いや、ひとはみな「死に場所」を探して生きているということなのだろうか。それは、愛する人のために生きる＝死ぬことと（おそらく）別のことではない。

1-2 ジーザス Vs SHIROH

イエス・キリストの最後の7日間を描いた、作詞ティム・ライム、作曲アンドリュー・ロイド・ウェバーの『ジーザス・クライスト・スーパースター』は1971年にブロードウェイで初演された。演出トム・ホーガン。1969年にシングル版「スーパースター」、翌年LP版「ジーザス・クライスト・スーパースター」の好評を受けての舞台化だった。全篇台詞はなく、音楽と歌曲のみで繰り広げられるオペラスタイルのロック・ミュージカルだ。73年には映画版も制作された（監督ノーマン・ジュイソン）が、舞台版とともども、キリスト教・ユダヤ教関係者からの批判は強かった。日本でも、同年劇団四季が浅利慶太演出で初演。さらに76年に「エルサレム版」、87年に「ジャパネスク版」が発表された。

人ではなく神になっていくジーザスに不安をつのらせるユダ、「以前は啓示に奮いたったが、今は身も心も疲れはてた」と嘆くジーザス。かれ自身、民衆の変わりようにどうしていいかわからない。3年が30年、いや90年にも思えてくると訴える。ゲッセマネの園ではじめ「なぜ私は死ななければいけないのか。私の死は報われるのか」と神に問いつつ、最後は「死にきるところをみせてやる！」と挑戦的に歌い上げる。「十字架に磔てこの身を引き裂き、血を流させて殺すがいい。この決意がかわらぬ前に」と。「裏切り者」ユダもまた、「神よウンザリだ。なぜ俺をお選びになった」と神への怒りをぶつける。「俺を殺したのはあなただ」。「神」を生み出すのも民衆なら、「神」を殺すのも民衆とでもいうように、ジーザスは捕えられ、磔にされる。「神よ、なぜわたしを捨てたのか」と訴えつつ、最後は「父よ あなたの御心に私の魂をゆだねます」とひとりごつ。

このミュージカルの特徴は、ジーザス・クライストとスーパースター、聖書の世界と現代のメディア社会を結びつけたことだ。スーパースターとしてのジーザス・クライスト。いやクライスト＝スーパースターとしてのジーザス。クライスト＝スーパースターを待望する民衆とジーザスとののはかりしれない、そして埋めようのない距離をいやというほど見せつける。ジーザスとは？ ジーザス・クライストとは？ スーパースターとは？ それに対する決定的な答えはない。不断に問いを突きつけてやまない点にこのミュージカルの新しさはある。『SHIROH』の衝撃もそれに近い⁵。みずからがなにものであるかわからいま、**「救い主」「奇跡の子」として死んでいくふたり**

の SHIROH。ジーザス・ユダマリアのドラマをふたりの SHIROH (ジーザス・ユダ?) をめぐる民衆のドラマに拡大していったところに『SHIROH』の真骨頂はあるといえよう。

1-3 メサイア Vs SHIROH

宝塚歌劇団花組公演『MESSIAH (メサイア) 異聞・天草士郎』は、作・演出原田諒、作曲・編曲玉麻尚一、振付・所作指導尾上菊之丞ほかのスタッフで2018年に上演された。

主役の天草四郎は倭寇の首領であり、天草に流れ付き、増田四郎時貞の名前を与えられるという設定だ。2番手男役のリノは実在の南蛮絵師山田右衛門作で、有明湾の湯島でキリシタンのために聖人画を描いており、山田右衛門作同様、ひとり生き延び、乱の「生き証人」として語るという役どころ。増田甚兵衛、渡辺小左衛門、その妻福 (甚兵衛の長女)、森宗意軒、松倉勝家、松平信綱といった登場人物は実在の人々だが、トップ娘役の流雨はオリジナルである。リノが描くマリア像のモデルであり、四郎が慕う女性。

原田は、島原の乱の本質を「自由と平等を求める戦い」のうちに見てとる。「四郎に率いられた彼らは“はらいそ”をこの世に築こうと決意します。“はらいそ”，つまり“パラダイス (天国, 楽園)”を意味する言葉ですが、彼らが目指した“はらいそ”とは一体何であったのか。四郎にとって、登場人物たちにとっての神とは何であったのか。作品の根幹として明確に描きたいと思っています」⁶。実際、四郎は、「神はほんとうにいるのか」と嘆き悲しむ人々に対し、生あるものを救ってこそ神だろうと反問する。しかし、一転、こここそ「はらいそ」だと訴える。「神はここにいる!」と自分の胸を指さす。この身にこの勇氣に神は宿る。自分を救ってくれたあなたがたが住むこの地こそ、はらいそではないのか。この地をはらいそにしようと説得する。その力強い声に人々はかれこそ「天の御子」と信じ、四郎についていくことを決める。結果は史実通り、幕府軍に原城を襲撃され、みな死んでいく。大階段を使って戦闘シーンをみせる垂直の構図、死んでいったものたちの上に大きく描きだされる十字架の構図が印象的だ。四郎は最後に呟く「みえたぞ、はらいその光が」。殉教によってしか「はらいその光」は見えないということだろうか。四郎の眼にはたしかに「はらいそ」が見えたのかもしれないが、他のものにとってはどうだったのだろうか。その答えはない (すくなくとも見えない)。

2 メタルマクベス

2-1 概要

『メタルマクベス』(2006)は、Rシリーズ(音もの)の系列に属する第2弾であり、原作シェイクスピア(松岡和子訳)、脚色宮藤官九郎(1970~)、演出いのうえひでのりの布陣からなるロック・ミュージカルである。いのうえ自身はミュージカルではなく、「音楽劇」といつているが、いのうえ歌舞伎はもう行き着くところまでいつているので、「ファンタジー的なミュージカルと、歌謡チャンバラ時代劇みたいなネタもの。その両方をやっていきたい」⁷といつている。「大音量で音楽を流

すっていう大きいコンセプトがすべての始まり。そこが出発点』であると。一方、宮藤は脚本家、俳優、作詞・作曲家、放送作家、映画監督、ミュージシャン等々、マルチな才能の持ち主であり、劇団☆新感線作品としては『蜚蜚峠』(2009)『Vamp Bamboo Burn〜ヴァン! バン! バーン!〜』(2016)がある。「メタルマクベス」というアイディアはすでにあった。いま機が熟し、R.S.C.=「ロックする(Rockin)シェイクスピア劇団(Shakespeare Company)」の発進だといのうえはいい、宮藤は「〈メタル〉と〈マクベス〉というキーワードが二つ合わさって、化学反応のようになんかすごいエネルギーが発生し、自分の頭からは決して生まれる筈のない新しいストーリーが生まれた」⁸と述べている。

音楽岡崎司、振付川崎悦子、主演は内野聖陽、松たか子、森山未來、北村有起哉、上條恒彦ほか、プラス新感線メンバー。ちなみに『メタルマクベス』は2018年IHIステージアラウンド東京で再演され、Disc 1(橋本さとし、濱田めぐみ主演)、2(尾上松也、大原櫻子主演)、3(浦井建治、長澤まさみ主演)と3バージョンが上演された。

舞台は、ESP王国の将軍ランダムスターと同僚エクスプローラーが三人の魔女と出会うシーンからはじまる。魔女たちはランダムスターを「マクベス」と呼び、「マホガニーの領主人、いずれ王になる方」と1枚のCDを差し出す。「知りたいことはすべてこのCDの中にある」と。それは1980年代に活躍したヘヴィ・メタルバンド「メタルマクベス」のアルバムであり、ジャケットにはランダムスターやエクスプローラー、さらには忠臣グレコそっくりの写真が写っていた。

舞台は一転して1981年の大阪。ヘヴィ・メタブーム(ジャパメタ)に湧く中、「メタルマクベス」というバンドが活躍していたが、バンドの構成は、ボーカルでリーダーのマクベス、ギターのパンクォー、ベースのマクダフ、ドラムのナンプラーという布陣。所属するダンカンミュージック社長元は、息子のきよしを「きよし・ウィズ・メタルマクベス」で売り出さないと持ちかける。身重の妻を抱えたマクダフはすべてを受け入れようとするが、マクベスは事務所をやめ、はじめからダンカン社長に懐疑的だったローズの意見に従うことにする。

再び2206年。マホガニーの領地を与えられたものの、ランダムスターは内心面白くない。CDを聞いたランダムスター夫人は、ESP王国レスポール王を殺せとランダムスターに迫る。そして祝宴の日、レスポールJr.の短剣を使って犯行は実行される。Jr.は身の危険を感じ、現場から逃げ出す。エクスプローラーも殺害されるが、子供のマーシャルは難を逃れる。エクスプローラーの亡霊はしつこくランダムスターに取り憑き、かれの神経を苛む。

それから5年。鋼鉄城で王位についたものの、ランダムスターは夜毎レスポール王の亡霊に取り憑かれ一睡もできず、地下室で「メタルマクベス」のCDを聞く日々が続く。その姿を見つめるランダムスター夫人=ローズもついに発狂する。フェルナデス国の将軍パール王の援助を得て、Jr.とグレコはランダムスター討伐にやってくる。殺しても殺してもランダムスター=マクベスは死なない。しかし、「電気が足りない」「俺に電気を流せ」とギターを引き続けるマクベス=ランダ

ムスターは鋼鉄城の自爆＝崩壊とともに消え去る。後には、二本指をつきたてたかれの片腕だけが残っていた――。

再演版は、大筋は変わっていないが、時代が2218年、未来の土地は青山から豊洲跡＝IHI ステージアROUND東京がある場所に変えられた（洒落だろう）。冒頭、初演同様、魔女3人の翻訳論議からはじまるが、「忠実忠実っていても、日本語に訳している時点でそれはもう忠実ではないんだから、翻訳者の主観を楽しむべきじゃない」という初演のセリフはない。そのほか、ダンカンミュージック元の息子が歌手ではなく、バンドの現場マネージャーであったり、ESP王国のレスポールが自分の息子を後継者に指名するなど、微妙な違いが見られる。最後に、ミサイルが舞台中央に立ち上がり、大量破壊兵器「陸の鯨」の実態が可視化されることも大きな違いだ。当然、ストーリーの変更に伴い、楽曲も若干変わらざるを得ない。例えば、歌手志望の元きよし（森山）の歌う「メタル演歌～七光り三度笠～」が削除され、レスポールの歌が増えている。

2-1 特徴

冒頭の3人の魔女の登場からして面白い。『マクベス』の松岡和子訳（「きれいは汚い、汚いはきれい」）と小田島雄志訳（「いいは悪いで悪いはいい」）がとりあげられ、「忠実忠実っていても、日本語に訳している時点でそれはもう忠実ではないんだから、翻訳者の主観を楽しむべきじゃない」（魔女のひとり「林さん」の台詞）と、さらりと脱マクベス化が図られる。

ロックコンサート張りの大音響、バックの大スクリーンに映しだされる歌詞や写真、さらには巧みな映像処理（たとえば松たかこの投身自殺の場面など）。とにかく、観客を飽きさせないスピーディな場面展開。ギャグあり笑いありチャンバラ？ ありの「ロック・ミュージカル」だ。物語は、2206年ESP王国と1980年代の大阪「（ヘヴィ）メタルマクベス」バンドが同時並行的に描かれるが、これに原作の『マクベス』が加わり、三重構造からなる作品ということができる。いや、さらに「メタル」（エレクトリック・ギター）の歴史が重ねられ、三重四重に楽しめる作品となっている。

「メタルマクベス」バンドのメンバーは、ヴォーカルのマクベス内野（内野）、ギターのバンクォー橋本（橋本）、ベースのマクダフ北村（北村）、ドラムのナンプラー（栗根）からなり、松たか子はマネージャー役のローズとして登場する。このメンバー名が、原作の『マクベス』と重なることはいうまでもないが、そこにローズはもちろんのこと、ナンプラーの名はない。ただし、『メタルマクベス』の最後でマクベスを追いつめるのは、まずフェルナンデス国パール王（ナンプラー）であり、ついでグレコ（マクダフ）である。原作と違って、ランダムスター（マクベス）は殺されない。かれは自滅する。そのことは何を意味するのだろうか。

一方、ESP王国のメンバーは、ランダムスター＝マクベス（内野）、ランダムスター夫人＝ローズ（松）、エクスプローラー＝バンクォー（橋本）、レスポール王＝元社長（上條）、レスポールJR＝息子きよし（森山）、忠臣グレコ＝マクダフ（北村）の面々である。

ESP王国が原作のメンバーならびにその物語をほぼ踏襲するのに対して、マクベス夫人となる

ローズやマクダフ夫人となるシマコ（高田聖子）、さらには元親子は「メタルマクベス」の外部にとどまる。いや、彼らがバンドおよびそのメンバーにかかわってくることによって、否応なしに「メタルマクベス」バンドに亀裂が生じ、崩壊していくという展開だ。「メタルマクベス」バンドがメジャー化を目指すとき、仲間のバンクォーが邪魔になり、いずれは元親子も最たる障害となるだろう（そこまでは描かれないが）。

ところで、1980年代と2206年をつなぐのは、「メタルマクベス」バンドが残した一枚のCDだ。魔女3人（3人とも色違いのミキハウスのトレーナー〔赤、緑、黄〕を着ているが、例のカレー事件の林某を思わせる〔右近健一演じる〕「林さん」は、途中2度ばかり松たか子「林B」と入れ替わる）が手にしているのもそれであり、CDを通して、未来のマクベスは過去のマクベスに回帰していく。「メタルマクベス」バンドの内紛はそのまま近未来に持ち越され、原作同様、未来のランダムスターは追いつめられ、夫人も自殺し、みずからも自滅＝自死する。とはいえ、なぜ、未来のマクベスはかくも過去のマクベス、いや「メタルマクベス」に惹かれ、回帰していくのか。

ここで興味深いのは、未来のESP王国のメンバーたちの名前だ。ランダムスター、エクスプローラー、レスポールはいずれもエレキギターの名称であり、かつランダムスターはESP社製、後2者はギブソン社製である。ちなみに、ローズウッドはギター素材名。メイプル、マホガニーも同様であり、ランダムスターの居城はメイプル城（待ち受けるのはランダムスター夫人＝ローズ）、さらに新たに手に入れるのはマホガニー城、そして最後に入場するのが「鋼鉄城」といった具合だ。

ギブソンは1902年創業のアメリカの大楽器メーカー。1952年ギタリストのレスポールと共同でソリッドギターを設計し、レスポールモデルを開発した。さらに1950年代末には、エクスプローラーを開発したことでも有名。他方、グレコは1960年に設立された日本の楽器メーカー（フェンダー・ジャパンブランドとして有名だが、ギブソン製レスポールのコピーも生産）。1975年に設立されたESPもまた、グレコ・ブランドに関わっていた椎野秀聰によって創業され、81年にアメリカ進出した音楽関連企業であり、ギブソンの伝統的モデルのコピーブランドを有する。パールも1946年に設立された打楽器・フルートの製造・販売メーカーである。

グレコもフェルナンデスもESPも、先行するアメリカのギブソン、フェンダーに対する、後行する日本の楽器メーカーにほかならず、先行二社をコピーするブランド企業であることは否めない。日米の主導権争いがそのまま透けて見えるようだが、かくして、ランダムスター（ESP）がエクスプローラー、レスポール（ギブソン）と袂を分とうとするのは当然だし、レスポールの忠臣グレコがレスポール Jr を守り、フェルナンデス（フェンダー系）国パールに託そうとするのも肯なかなといえよう。いうまでもなく、パールはギターではなく打楽器メーカーであり、パール＝ナンプラーがドラム担当である以上——。加えて、ESPは1980年代のジャパニーズヘヴィメタル（ジャパメタ）ブームに乗り躍進したが、フェンダーはすでに1965年に売却、ギブソン社も1986年に買収され、再編を余儀なくされていたという事実も、このミュージカルになんらかの影を落としているかもしれない。

2-3 ランダムスター＝マクベス

物語をもう一度整理しよう。「メタルマクベス」バンドは解散し、マクベスとローズのふたりきりになる。そして落ちぶれたマクベスは精神を病んだローズ（なぜかミキハウスの赤いトレーナーを着ている）とふたりライブを敢行する。そこで歌われるのが「女の股から生まれた男」。「女の股から産まれた男などに／誰もお前を倒せない（ローズ）／女の股から産まれた男やさかい／誰も俺を倒せない（マクベス）」（予言 CD に収められた曲だ）。ローズとマクベスの二重唱は、途中から、魔女たち、さらにはレスポール王、ランダムスターへと歌い継がれる。過去から未来へのシフトだ。一方、未来のランダムスター夫人も精神を病み、夢遊病者のように徘徊し、罪を告白する。そしていう、「マクベスの考えてることがわからない」。彼女は「私の体は 残忍さでいっぱい／頭のでっぺんから爪の先まで／殺意 殺意 殺意 殺意」と叫んで倒れる。彼女はもはやランダムスター夫人ではない。舞台は、ふたたび 1980 年代に舞い戻る。マクベスひとりのゲリラライブが予告されるが、またもやふたりライブ。未来のローズ＝黒いドレスのランダムスター夫人が高らかに「私の殺意」をシャウトする。「私の体は 残忍さでいっぱい／頭のでっぺんから爪の先まで／殺意 殺意 殺意 殺意」。それに答えるようにマクベス＝ランダムスターも「私の体は 虚しさでいっぱい／頭のでっぺんから爪の先まで／失意 失意 失意 失意のどん底」と歌う。ここで気をつけなければいけないのは、ランダムスターがローズの着ていたミキハウスの赤いトレーナーを着ていることだ。ランダムスター夫妻がそれぞれマクベスとローズに憑依しているだけではない。ランダム自身がすでにローズと一体化している、いや魔女に呪縛されているということだ。

「メタルマクベス」バンドのファンたちもミキハウスの赤いトレーナーを着ていることから、彼らのひとりが CD を手にいれ、それが魔女の手に渡ったのだらうとも推測できるが、ローズがバンドのマネージャーであることを思えば、魔女のひとり（林）——再演では植木——がローズに乗り移ったと考えるほうがわかりやすいかもしれない。事実、「魔女の予言」（「マクベス いずれは王になるお方」「バンクォー 王にはならないが王を生み出す男」）を告げるのは、「林 B」の松たか子その人だからだ。

CD 所収曲 10 曲のうち、「予言」と銘打たれたものは二つ。最初の「魔女の予言」（「マクベス いずれは王になるお方」）「二つ目の予言」（「バンクォー 王にはならないが王を生み出す男」）に対し、「三つめの予言」のタイトルはないが、「女の股から生まれた男」がそれにあたるだろう。「女の股から産まれた男などに／お前の苦悩は分かるまい／女の股から産まれた男やさかい／誰もお前を許さない」。さらにこのナンバーには、血まみれになったレスポール王が登場し、「猛り狂った猿の子孫が／剣で空を真っ二つに切り裂き／その裂け目から／陸の鯨が目を覚まさぬ限り／お前の世は安泰だ」という予言が付け加えられる。原作のパーナムの森に相当する予言であり、まさに予言通りに、いや予言がことごとく裏切られるようにことは運ぶ。眠っていた「陸の鯨」がついに目を覚ますとき、つまり、「鋼鉄城」が自爆＝崩壊するとき、ランダムスター＝マクベスも自滅する。

ところで、CD の最終曲「私の殺意」はインストルメンタルであり、歌詞はない。その空白を埋めるのは松演じる魔女 (林 B) = ローズ = ランダムスター夫人だ。彼女の言葉がそのナンバーを、いや CD 全体を完成させるということだろうか。「私の体は 残忍さでいっぱい／頭のでっぺんから爪の先まで／殺意 殺意 殺意 殺意／ (…) まるで殺意のタマネギ／剥いても剥いても 殺意 殺意／ (…) 私の殺意は レッドゾーン／私が時々遠くで叱って／だって二人は め・お・と」。最終的にランダムスター夫妻の一心同体ぶりが強調されるが、ミュージカル最後で同じナンバーがリプライズされるとき、歌詞は微妙に異なる。前段はかわらない。しかし中段は「まるで殺意のタマネギ／剥いても剥いても 魂はない」と変わり、さらに続く後段部分は途中で途切れてしまう。ランダムスター夫人 = ローズ = マクベス夫人？ が投身自殺してしまうからだ。彼女の自殺後、ランダムスターによって歌い継がれる歌詞は、まさに『メタルマクベス』版「トゥモロー・スピーチ」だ。

私の体は失意でいっぱい／愛する妻を亡くした今
つらい つらい／かなり つらい
私の失意は ブラックホール／王冠が泣いている
空っぽの頭の上で
私の失意は ブラックホール／叱ってくれたお前はもういない
だって私は こ・ど・く
愛する妻も 友達も去った／残ったものは虚しさだけ
錆びた城と 虚しさだけ

「なぜ戦うのだ」というレスポールの亡霊に対し、「殺しが好きだからにきまっているだろう」とマクベスは抗弁する。そしてローズの亡霊を見たランダムスター = マクベスは、グレコ = マグダフに切られても切られても倒れない。「女の股から産まれた男などに／誰もお前を倒せない」というローズの言葉通りに。「電気がたりない」というマクベスに尋常ならざる電流が走る。そして、ギターをかき鳴らしながら、「陸の鯨」「鋼鉄城」もろとも自爆する。

「魂がない」以上、ふたりは死ぬしかない。しかしランダムスターの死は、「失意」から「殺意」への、「こ・ど・く」から「め・お・と」への大いなるジャンプではないだろうか。ランダムスター夫妻はマクベス = ローズに生成しなければいけない。すくなくとも、彼らに残された道は「メタルマクベス」の CD を生きること。いや、「殺意」と「失意」、「め・お・と」と「こ・ど・く」の埋まらない距離を埋めること。それこそが、「メタルマクベス」の完成ではないのか。そのためにこそ、この 1 枚の CD は残されたのではなかったか。とすれば、彼らは予言に呪縛されて死んでいくのではない。未完の予言、予言の空白を埋めるべくみずから死を選ぶのだ。「メタルマクベス」という、自己同一性の発見のドラマ。分離した「体」と「魂」が互いを求め合うように、メタルとマクベス

はドッキングする。

原作『マクベス』の台詞の端々を縦横無尽に切り刻みながら⁹、その核心にあるマクベスとマクベス夫人の関係を「殺意」と「失意」というキーワードで切り結ぶ、宮藤の手腕は流石だ。ふたりは「体」と「魂」の分離を生きている。かくして宮藤は、マクベス夫妻は本来「一心同体」「一卵性夫婦」であったという『原作』の核心¹⁰を、予言の実現、ふたりの自殺＝過去と未来、魂と体の和解というかたちで実現する。ある意味、マクベスの最期を母胎回帰（胎児への回帰）というかたちで描いた蜷川幸雄（『NINAGAWA マクベス』1980）以上に、センチメンタルといえようが、それもメタルのなぜる業だろう。未来のマクベスはすでに魂を失っている。原作のマクベスにもおそらく魂はないとすれば、「メタルマクベス」だけが失楽園として機能するだろう。発見されないかぎり、楽園は失楽園にとどまる。

3 五右衛門ロックシリーズ

3-1 五右衛門ロック (2008)

「古田主演で、石川五右衛門でロック」といういのうえのアイディアからはじまったこの企画、「いのうえ歌舞伎」的な厚みのある人間ドラマではなく、「派手で楽しい、いわゆるこれまでの新感線のエンターテインメントの総決算的な作品」¹¹として構想・実現された。痛快娯楽活劇。東京大阪 10 万人動員を目指して、劇団外から、北大路欣也ほか、松雪泰子、江口洋介、森山未来、川平慈英等が召集された。迎えるうつ古田新太、橋本じゅん、高田聖子、栗根まこと等の劇団メンバーたち。スタッフは、作中島、演出いのうえ、作詩森雪之丞、音楽岡崎司、振付川崎悦子の面々である。

物語は、秀吉暗殺を図ったかどで大釜で死んだはずの五右衛門（古田）がじつは生きており、かれを追う盗賊目付の左門字（江口）や真砂のお竜（松雪）ら泥棒仲間とともに、大海原に繰り出し、ある島に流れ着くというストーリーだ。その島の「月生石」（岩塩じつは阿片以上の麻薬）をめぐって各国の思惑が交差するが、「月生石」の恐ろしさを誰よりも知る島の支配者クガイ（北大路）は——かれは中毒患者になった妻をみずから手で殺したために息子（森山）に恨まれている——、地下深く火薬を仕掛け、島そのものを沈めようとする。「イスパニアにイングランド、それに日の本の秀吉。そいつらの狂った野望を根こそぎ奪っていく。あんたは大した大泥棒だったよ」¹²とは、五右衛門の言葉だ。ちなみに、史実の五右衛門は、秀吉の手下に捕えられ、1594 年京都三条河原で一子と共に処刑されたが、「石川や 浜の真砂は 尽くるとも 世に盗人の 種は尽きまじ」という辞世の句は、このミュージカルでもそのまま使われている。さらに、五右衛門には伊賀忍者百地三太夫の弟子という伝説もあり、この作品でも、高田聖子演じるインガが伊賀忍者（元仲間）として登場している。

歌と踊り（川平や森山のタップ、殺陣も含め）と笑いという新感線の魅力がふんだんに盛り込ま

れたミュージカル（中島いわく「勸善懲惡明朗活劇」）だ。さすがに北大路の存在感は群を抜いており、じつの子供であるカルマ（森山）との対比が印象的だが、古太と江口の追いつ追われる関係、川平と右近健一のイスパニア商人コンビ、橋本と濱田マリの「小さい」ズッコケ夫婦、松雪と高田のクガイをめぐる女の戦い、さらには江口と原住民であるホッタル族の女たちとの交流等々、それぞれの見せ場が続き——思いの外「古田の出番が少なくなった」と中島は述懐する¹³——、ストーリーが見えにくいのが、一気にラストへと突き進むのはいつもの（冒険活劇ものの）パターンだ。

興味深いのは、歌舞伎の白浪五人男（日本駄右衛門、南郷力丸、忠信利平、赤星重三、弁天小僧の五人の盗賊）か三人吉三（和尚吉三、お嬢吉三、お坊吉三の三人の盗賊）を意識してか、クライマックスで、カルマ、左門字、お竜、五右衛門4人が並んで見得を切る場面はその後の作品（『薔薇とサムライ』『ジバングパンク』）でも踏襲され、大団円を飾る決めパターンになっている。

カルマ　：人の心の弱さにつけこみ、ペテンハッタリ嘘八百。正義と自由の名の下にお前らだけは許さない。我が名はカルマ。孤高の王子！

左門字　：盗賊退治が本業なれど、情に動くも武士の意地。京都所司代盗賊目付、性は岩倉、名は左門字！

お竜　　：胸に短筒小股に刃。触ると落ちるよ、その首が。棘ある花は闇に咲く。女白浪、真砂のお竜。

五右衛門：さて、どん尻に控えしは、浜の真砂に天の星、悪に限りはねえけれど、その悪党の上に行く、腹もふてえが器量もでけえ。天下の盗っ人石川五右衛門。冥土の土産に、あー

四人　　：覚えておきな！¹⁴

みんなが島から逃げようとするなかで、クガイ（とインガ）同様、ホッタル族の女たちはそこを動こうとしない。逃げろという左門字に、「私たちはここでしか生きられない」「だからここで生きここで死ぬ」。「ここにいのを選んだのは私達」「だからここで生きここで死ぬ」「人は生き人は死ぬ」。しかし、と言いかける左門字に「ありがとうサモンジ」「でも大丈夫。サモンジもやがて死ぬ」「人は生き人は死ぬ」¹⁵。すべてが相対化される瞬間だ。

3-2 薔薇とサムライ GoemonRock OverDrive (2010)

『薔薇とサムライ』は天海祐希が出演ということで、トントン拍子にストーリーがきまっていたようだ。市川染五郎・天海主演の『阿修羅城の瞳』（再再演 2003）は和物だったから、今度は洋物にしよう、いっそ『ベルばら』っぽいものに。前回は五右衛門の出番が少なかったのもう少し増やそう、云々。事実、この作品は古田と天海ががっぷり四つに組み、徹底してふたりに歌い、踊らせている。元タカラジェンヌと新感線の競演＝饗宴といったいいだろうか。元タカラジェンヌ

の天海および森奈みはると新感線の相性はすこぶるいい。タカラジェンヌのイメージを良くも悪しくも裏切っているからだ。宝塚的残像を残しつつ、宝塚的男役像／娘役像を大きく逸脱する面白さ。新幹線スタッフは、エンターテインメントの何たるかを知り悉している。作中島、演出いのうえ、作詩森雪之丞、音楽岡崎司、振付川崎悦子の布陣はかわらず、外部キャストして、天海のほかに、浦井健治、山本太郎、神田沙也加、森奈みはる、藤木孝といった面々が主演している。迎え撃つ新感線メンバーは前回同様だ。みんな歌って踊れるのが強みだ。

中島は『薔薇とサムライ』は『蜜幽鬼』と表裏一体で、女王の誕生の物語だという。「惑いゆれる男と女が主人公だと『蜜幽鬼』になり、迷わない男と女が主人公だと『薔薇とサムライ』になる」¹⁶。

物語は、17世紀半ば、ヨーロッパのとある小国が舞台。日本を離れ、7つの海を股にかける海賊の石川五右衛門（古田）は、意気投合した女海賊アンヌ・ザ・トルネード（天海）の用心棒を引き受ける。しかし、じつはアンヌは先王の隠された娘だった。城の兵士に連行され、王として即位することを強要される。事件の裏に陰謀があることをかぎとった五右衛門は、アンヌを助け出すため王国に乗り込む。善玉・悪玉のふわけはいつものとおりだが、一幕最後に五右衛門（海賊側）とアンヌ（王側）が闘わなければなくなるのはいわば必然。互いの変貌というよりは、アンヌの身分が変わったことにより、当然周囲の思惑が絡んでくるためだ。それにしたがって、彼らをとりまく人間関係も微妙に変わってくる。海賊同士の闘いから海賊と王家との闘いへとスライドし、海賊アンヌが王女アンヌへと（衣装の七変化と同時に）変化していく物語にあって、海賊側と王家側もけっして一枚岩ではない。デスペラード豹之進（山本）はつねに五右衛門の命を狙い、ボスコーニュ国王子シャルルは一貫してアンヌを恋慕う。王座を狙うボラインボン大宰相親娘（藤木、高田）の子供ポニー（神田）は宮廷から出ることを願い、ガファス夫人エリザベッタ（森奈）は夫（栗根）に反旗をひるがえす。女海賊たちもふくめ、とにかく女性たちが元気だ。わけても、天海の七変化（へんげ）は見物だ。海賊姿（えび茶色）から白いドレスに身を包んだ天海がいまいちど男役に変身（白）。アンドレ（天海は宝塚時代アンドレを演じている）ならぬオスカルかと思いきや、赤い衣装の女王となり、赤い軍服（アンドレ?）、さらに紺、黒と上着の色は変わり、最後の十字架にかけられるシーンはジャンヌ・ダルクそのものだ（全身白）。最後の五右衛門とのツーショットでも、金の上着、赤のドレスと変化する。あわせて髪型（ロングからショート、またロング）も変わるとなれば、天海ファンのみならず、喝采の拍手を送るはずだ。

この作品は、前作と違って、個々のキャラクターの見せ場はあるものの、すべて物語の主軸、主役のふたりにより添うかたちで展開され、エピソードを強引につなげたという印象はうすい。話を拡散させることなく、主役ふたりの影響圏内におさめられている。その分、わかりやすく見やすい。そしてなによりも主役ふたりががっぷり四つに組むとなれば、観客にとってこれ以上の贅沢はない。スター主義のひとつの在り方を示しているといえよう。中島・いのうえが、宝塚的約束事を

自家薬籠中のものになっているということか。以下はふたりの見得切り。

五右衛門：問われて名乗るもおこがましいが

アンヌ　：知らざあ言ってきかせやしょう。

五右衛門：7つの海の荒波も、外道が仕込んだ姑息な毘も、砕いて笑う大悪党。

あんぬ　：輝く太陽この目に宿し、海賊稼業のその果てに、見えた心を光に刻む。

五右衛門：天下の盗っ人、石川五右衛門。

アンヌ　：海賊女王、つむじ風のアンヌ。

五右衛門：冥土の土産に――。

二人　　：あ、覚えておきな!!¹⁷

とにかく出だしからテンポがよく、キレがある。（歌詞文字を含んだ）映像と（手作り）舞台をうまくつなぐ演出だ。最初の船上での戦闘場面から、とある港町のバーのダンスシーンにつなぐ場面展開からしてそうだし、とにかく冒頭15分、切れ目なく歌とダンスが続く。ポップスからワルツ、さらには演歌まで、曲調もいろいろだ。古田と天海はここぞとばかり歌いまくる。前後2作に比し、舞台が外国であるせいか、摩訶不思議な和洋折衷にすんなり入っていけるのも強みだ。シリーズ最後の『ジバングパンク』では、そのことを意識したのか、シャルル王（浦井）とマローネ（高田）が五右衛門を追いかけて日本にやってくる。

3-3 ジバングパンク（2012）

一作目は「俺〔中島〕なりの『ルパン3世』」、二作目は「俺〔中島〕が見たい天海祐希」とすんなりコンセプトが決まったが、3作目は（三浦春馬、蒼井優の参加は早く決まったが）難航したようだ。なんとか名探偵と怪盗の知恵比べを思い付き、「三作目にして初めて本格的な怪盗物にして、一番シンプルな冒険活劇になった気がする」¹⁸と中島はいう。

作中島、演出いのうえ、作詩森雪之丞、音楽岡崎司、振付川崎悦子の布陣はかわらず、外部キャストとして、三浦、蒼井のほかに、浦井健治、高橋由美子、村井國夫、そして磨赤児が召集された。迎えるつ新感線キャストは古田ほかいつものメンバーだ。

物語は、秀吉の時代に逆戻り。海外から帰ってきた五右衛門、今度は空海のお宝（黄金の仏像）を盗もうとする。そこに立ちのはだかるのは、名探偵・明智小五郎ならぬ、明智光秀の息子で、盗賊目付探偵方・心九郎（三浦）と怪盗ルパンならぬ女盗賊・猫の目お銀（蒼井）。黒幕――権力の亡者と金の亡者――は秀吉（磨）と堺の豪商（村井）であり、そこに石田三成（栗根）や前田慶次郎（橋本）が絡み、なぜかしら、『薔薇とサムライ』のふたり、いや三人（シャルル王子・浦井、マローネ・高田、天海〔ただし映像主演〕）が顔を出す。前作は17世紀半ばだったはずなどと野暮はいうまい。ものの大小にかかわらず、見えるものから見えない謎に至るまで、盗めるものはなんでも盗

む盗っ人集団によって、謎解きが仕事のはずの探偵が、(天下を盗もうとして) 逆に自分の心の闇が盗まれるというコメディ。

このミュージカルの特色は、圧倒的に歌とダンスが多いこと。それも重唱・群舞が多い。とりわけ、三浦は9曲、蒼井は8曲に絡んでいる。心九郎曰く「脳髓活性歌舞音曲」¹⁹ 八面六臂の活躍だ。ちなみに、主役の五右衛門は3曲だけ。完全に狂言回しに徹している。以下は今回の見得切り。

シャルル：愛する人の願いを胸に、海を渡って悪を討つ。歌う貴公子、シャルル・ド・ボスコーニュ！

お銀：ろくな死に方しないのは覚悟の上の盗っ人稼業。生き方くらいは意気地を見せる。鵜の目鷹の目猫の目お銀。

心九郎：揺れる心を乗り越えてこの世の闇に光をあてる、頭も切れれば身体も切れる、謎と悪事を一刀両断、その名も明智心九郎！

五右衛門：さてしんがりに控えしは、西の果てならヨーロッパ、東の果てはニッポンと世界の闇を股にかけ、ワルの上行く大悪党、天下の盗っ人石川五右衛門。冥土の土産に、あー

四人：覚えておきな!!²⁰

物語の構成もさることながら、映像を駆使した立体的な舞台、スピーディな場面転換の妙。第一作目『五右衛門ロック』の反省を踏まえ、各キャラクターの魅力を十分に生かしつつ、話が分散しないようにシンプルなストーリーにしたためだろうか、いわば点が線化され、安心して楽しむことができる。物足りなさも、さりとて盛り過ぎの印象もない。シンプル・イズ・ベストの舞台作りだ。

* * *

劇団☆新感線の勢いはいまだとまらない。2016年から2018年にかけてIHI ステージア라운드東京で、『髑髏城の7人』6バージョン、『メタルマクベス』3バージョンを上演したあと、いのうえ歌舞伎「亜」alternative『けむりの軍団』(2019)を東京、福岡、大阪で上演。外部キャストなしの、劇団員ほぼオールメンバーによる公演だった。2020年春には、作中島／演出いのうえで、いのうえ歌舞伎の新作『偽義経冥界歌(にせよしつねめいかいにうたう)』(生田斗真主演)の上演が予定されている。

「いのうえ歌舞伎」「R シリーズ」「ネタもの」の3本立はこれからも続きそう。ほどよいバランスをとりながら、娯楽活劇——殺陣であれ、音楽であれ、お笑いであれ——の可能性に賭けている。それは日本のオリジナルミュージカルの可能性のひとつにほかならない。中島はいう。「日本の小劇場では劇作家と演出家を兼ねる人も多いけど、やっぱりそれは、作家が演出してるか、演出

家が本も書いてるかのどっちかじゃないのかな。で、最終的には本か演出のどちらかが甘くなる。僕は、新感線がここまでやってこれたのも、作家と演出家が別だったからじゃないかとも思っていて」²¹。

ふたりの即かず離れずの関係—安易に妥協することなく、互いに攻め続ける関係が一日でも長く続くことを期待したい。

[注]

- 1 『Zipanng Punk』パンフレット (いのうえのことば)。
- 2 扇田昭彦も「荒削りながら、日本のオリジナル・ミュージカルとして出色の面白さとパワーを持つ作品」と評価する (『ミュージカル時評 No. 236』『ミュージカル』Vol. 240, 2005 年 1 月)。
- 3 天草四郎の映画版として着目すべきは、大島渚監督作品『天草四郎時貞』(東映 1962 年)。石堂淑朗と大島渚の共同脚本。天草四郎役は大川橋蔵で、原城に赴くまでの軌跡が描かれる。前作『日本の夜と霧』(1960 年)に続く、長回しのロングショットと闇が多用され、時代劇らしからぬ議論劇が特徴。宝塚版としては、すでに甲にしきが『炎の天草灘』(1972 年花組)で、大地真央が『春の踊り—南蛮花更紗—』(1983 年月組)の一場面で天草四郎を演じているとのこと。
- 4 中島かずき『SHIROH』(原作戯曲)論創社, 2004, p. 157 以下の引用後の()内数字はページ数
- 5 同上, p. 166
- 6 「強大な体制側と対立する信者集団を率いる孤独な指導者、指導者自身が抱える人間的な悩みと矛盾など、2つの物語の間には、ある程度共通する部分がある。『SHIROH』の中には部分的に、『ジーザス』を連想させる曲調の歌もある」(扇田昭彦, 前掲『ミュージカル時評 No. 236』)。
- 7 『メタルマクベス』初演パンフレット (いのうえインタビュー) B-7
- 8 『メタルマクベス』初演パンフレット A-10/11
- 9 「きれいは汚い、汚いはきれい」「マクベスは眠りを殺した／マクベスはもう眠れない!」「俺の心はサソリでいっばいだ!」「朝が来なければ夜は永遠に続くから」「女から生まれたやつには屈伏しない」といった『マクベス』の台詞は、さまざまに変奏され、台詞なり歌詞に反映されている。
- 10 オーストラリア映画『マクベス ザ・ギャングスター』(ジェフリー・ライト監督, 2006)の最後は、マクベスが浴槽で自殺したマクベス夫人のもとにかけより、「死の接吻」で終わる。これもまた「一卵性双生児」的な解釈といえるかもしれない。
- 11 中島かずき『五右衛門ロック』論創社, 2008 年, p. 163
- 12 同上, p. 154
- 13 中島かずき『Zupung Punk』論創社, p. 159
- 14 同上『五右衛門ロック』p. 144
- 15 同上, p. 152
- 16 中島かずき『薔薇とサムライ』白水社, 2010 年, p. 165
- 17 同上, p. 156
- 18 中島かずき『Zupung Punk』p. 161
- 19 同上, p. 11
- 20 同上, p. 146
- 21 「中島かずきさんに戯曲のこと聞いて見た」「イーオシバイドットコム 10 周年企画」2012 年 8 月

【資料 1】『SHIROH』

第 1 幕

- 1) 約束の地～いんへるの～ (寿庵, 津屋崎主水, お福, 四郎)
- 2) 人のツバサ (シロー, ゼンザ, マツ)
- 3) Dance (シロー)
- 4) 絵双紙屋 お蜜 (お蜜)
- 5) もう一度 海へ (ゼンザ, シロー, マツ)
- 6) 空のしくみ (お蜜, シロー)
- 7) 我らの御魂をはらいそに (お福, リオ)
- 8) ヘイユウ四郎 (四郎, 甚兵衛, お福)
- 9) なぜに奪われし光 (四郎, リオ)
- 10) 十兵衛参上! 1- (Instrumental)
- 11) お蜜と十兵衛 (お蜜)
- 12) かっちゃん&しげちゃん (寿庵, 松倉勝家, 板倉重昌)
- 13) ROCK'N イズノカミ (伊豆守, 松倉勝家, 板倉重昌)
- 14) 伊豆守のぼやき (伊豆守)
- 15) 忍法・水鏡 (お蜜, お紅, 伊豆守)
- 16) さんじゅあんの闇市 (四郎, お蜜, ゼンザ, シロー)
- 17) 十兵衛参上! 2 (Instrumental)
- 18) さんじゅあんの闇市 (リプライズ) (リオ)
- 19) 奇蹟の子はどこに (四郎, 寿庵, 小左衛門)
- 20) 主よ, この声が聞こえますかー
- 21) キリシタン目付に国境はない (津屋崎主水, 三宅蔵人)
- 22) まるちり～握った拳に神は宿る～ (シロー, お福, 甚兵衛, リオ, ゼンザ)
- 23) 天の御子を我らに (お福)

第 2 幕

- 24) さんちゃご～御子は舞い降りられた～ (寿庵, シロー, 松倉勝家)
- 25) しげちゃんからの手紙 (板倉重昌)
- 26) とまどいの月 (お蜜)
- 27) 海はつながってる (シロー, ゼンザ, マツ)
- 28) お蜜と寿庵 (寿庵, お蜜)
- 29) ふたり SHIROH (シロー, 四郎)
- 30) のりかかった船 (シロー, お蜜, 寿庵)
- 31) 城を造ろう! (シロー, 四郎, 松倉勝家, 津屋崎主水, 三宅蔵人)
- 32) 板倉重昌 A Go Go! (板倉重昌, 松倉勝家)
- 33) 意味のある人生 (伊豆守)
- 34) 光を我らに (シロー, 甚兵衛, 寿庵, お福)
- 35) 主よ, なぜ彼なのですか (四郎, シロー, リオ)
- 36) お蜜の嘆願 (お蜜, 伊豆守)
- 37) 人のツバサ (リプライズ) (シロー, お蜜)
- 38) 幕府の犬に断罪を (寿庵, 甚兵衛, お福, 四郎, シロー)
- 39) お蜜の真実 (お蜜)
- 40) 砂の城 (シロー)
- 41) キリシタン炎上 (Instrumental)
- 42) 最後の談判 (伊豆守, 四郎, 寿庵, シロー, お蜜)
- 43) さらば神よ～神の王国をつくれ (シロー, 寿庵)
- 44) 御子は我らと (お福, リオ)

45) 四郎の懺悔 (四郎, 寿庵)

46) はらいそ (シロー, 寿庵)

【資料2】『メタルマクベス』(下線部「CD」所収曲)

第1幕

- 1) きれいは汚い, ただしオレ以外: ランダムスター (内野)
- 2) 炎の報告 ～続・炎の報告: 冠君 (冠)
- 3) 魔女たちの予言: 魔女たち (右近, 村木, 山本, 松)
- 4) 自問・シャウト・自答: ランダムスター (内野)
- 5) リンスはお湯に溶かして使え: メタルマクベスバンド (北村, 橋本)
- 6) ダイエースプレー買ってこいや: メタルマクベスバンド (北村, 橋本)
- 7) 私の殺意: メタルマクベスバンド/ランダムスター夫人 (松)
- 8) メタル演歌～七光り三度笠～: 元きよし (森山)
- 9) スコピオンハート: ランダムスター (内野)
- 10) 王を弔う唄: 冠君 (冠)

第2幕

- 1) 夫人のため息: ランダムスター夫人 (松)
- 2) あの娘のブーツは豚の耳の匂い: エクスプローラー (橋本)
- 3) 二つめの予言: ランダムスター (内野)
- 4) スコピオンハート part2: ランダムスター (内野)
- 5) 女の股から生まれた男: マクベス/ローズ (内野/松) →ランダムスター (内野), 魔女
- 6) 未亡人哀歌: グレコ夫人/ローマン (高田/中谷)
- 7) 明けない夜は SO LONG: レスポール JR (森山)
- 8) 私の殺意～私の失意: ランダムスター夫妻 (内野/松)

【資料3】『五右衛門ロック』

第一幕

- 1) 五右衛門ロック (松雪)
- 2) 冒険商人ペドロとアビラ (川平・右近)
- 3) ゾクゾクと海賊 (古田ほか)
- 4) 国王陛下万歳! (冠)
- 5) 復讐こそ我が命 (森山)
- 6) 世界はお金で回っている (川平・右近)
- 7) バラバの奇襲 (冠)
- 8) ちっちゃいアナタ (橋本・濱田)
- 9) 運命 (松雪・北大路)

第2幕

- 1) ここは地の底地獄穴～鉄の女 (高田)
- 2) 絶望と光 (森山)
- 3) ホッタル族の歌 (女性合唱)
- 4) 海を渡ったサムライ (江口ほか)
- 5) ホッタル族の歌～リプライズ (女性合唱)
- 6) 忠義って素晴らしい (川平, 江口)
- 7) 忍びの恋 (高田)
- 8) お色気合戦 (高田, 松雪)

- 9) 果てしなき戦い (冠／右近, 濱田, 橋本／森山, 川平)
- 10) ちっちゃいアナタ〜リブライズ (橋本・濱田)
- 11) ホッタル族の歌〜リブライズ (女性合唱)
- 12) 五右衛門ロック〜リブライズ (松雪, 古田ほか)